

仙台市文化財調査報告書第42集

宮城県仙台市

# 郡山遺跡

――宅地造成に伴う緊急発掘調査報告――

1982・3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第42集

宮城県仙台市

# 郡山遺跡

——宅地造成に伴う緊急発掘調査報告——

1982・3

仙 台 市 教 育 委 員 会

## 序 文

郡山遺跡は古くから古瓦や土師器の散布する所として注目を浴び、仙台市内にある著名な遺跡として知られてきた所でもあります。しかし、都市化の影響を受け、近年宅地開発が急速化しつつあり、今回の調査は宅地造成に伴う緊急発掘調査として実施したものであります。

郡山遺跡は昭和54年に初めて調査が実施され、また、昭和55年度より5ヶ年計画で緊急範囲確認調査が実施され、これまでの調査の結果から、樅木と大溝をもって外郭とする施設が検出され、推定方四町の広範囲にわたって区画された古代官衙跡であり、造営年代が7世紀末から8世紀初頭という多賀城以前に遡る可能性もあるという。古代東北の開拓史を解明する上で貴重な遺跡といえます。

今回の調査は、推定方四町の官衙に付属して造営されたと考えられる推定方二町の寺院跡の西辺部にあたるところ約1,100m<sup>2</sup>が対象となり、掘立柱建物跡、何らかの区画施設と考えられる二列の材木列、土壤、溝跡の遺構群が発見され、多くの成果を得ることができました。本書はその成果についてまとめ上げた貴重な報告書であります。

この調査や報告書の作成にあたり、地権者庄子善重氏をはじめ、多くの方々の御協力をいたしました。ここに深甚なる感謝を申し上げます。

本報告書は市民各位はもとより、学徒諸兄の参考・活用を念ずるとともに、当市の文化財保護思想の普及啓蒙の一助となれば幸いに存じます。

昭和57年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤 井 黎

## 例　　言

1. 本書は仙台市郡山に所在する郡山遺跡第13次発掘調査の報告書である。

2. 本調査の経費は、原因者庄子善重氏の負担による。

3. 本文の執筆は下記のとおり分担した。

本文執筆　　I、II、III 1～3……青沼一民

III 4……木村浩二

遺構トレース……斎藤誠司、谷津妙子

遺物実測・トレース……村田晃一、芳賀英実、青沼一民、赤井沢まり子、谷津妙子

編集は木村、青沼が行った。

4. 遺構図の平面位置図は相対座標で高さは標高値で記した。

5. 平面位置を表示する相対座標は、相対座標点を任意に設置したNo.1原点(X=0、Y=0)としている。

6. 文中で記した方位角は真北線を基準としている。

7. 郡山遺跡の遺構略号は次のとおりとした。

S A　　柱列跡・櫛木列・杭列

S B　　建物跡

S D　　溝　跡

S E　　井戸跡

S I　　竪穴住居跡・竪穴造構

S K　　土　　壙

S X　　その他の遺構

8. 本報中の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐原：1970)を使用した。

## 目 次

序 文	
例 言	
I はじめに	1
II 調査に至る経過	5
III 第13次発掘調査	6
1. 調査経過	6
2. 発見造構	6
3. 出土遺物	17
4. まとめ	20

## 図 版 目 次

図版1 郡山遺跡航空写真	23
図版2 調査区全景	24
図版3 S B 113 掘立柱建物跡	24
図版4 S B 113 掘立柱建物跡、西2・南1 掘り方セクション	25
図版5 S B 113 掘立柱建物跡、西1・南2 掘り方セクション	25
図版6 S B 113 掘立柱建物跡、西1・南3 掘り方セクション	25
図版7 S B 114 掘立柱建物跡、南1・東2 掘り方セクション	26
図版8 S A 104 材木列セクション	26
図版9 S A 103 材木列底面検出状況	26
図版10 S A 104 材木列底面検出状況	27
図版11 S A 104 材木列セクション	27
図版12 S K 119 土壌セクション	28
図版13 S K 122 土壌セクション	28
図版14 S K 120 土壌全景	28
図版15 S X 118 遺物出土状況	29
図版16 S X 118 全景	29
図版17 出土遺物	30
図版18 出土遺物	31

# I はじめに

## 1. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課

課長 永野昌一

主幹兼文化財調査係長 早坂春一

文化財調査係 主事 木村浩一、教諭 青沼一民

発掘調査に際して、都山遺跡発掘調査指導委員会の先生方及び諸機関から御教示をいただき、記して感謝したい。

東北学院大学文学部教授 伊東信雄、東北大学工学部教授 佐藤巧、宮城学院大学助教授 工藤雅樹、東北大学文学部助教授 須藤隆、多賀城跡調査研究所長兼東北歴史資料館副館長 佐藤宏一、国立歴史民俗博物館助教授 阿部義平、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館、奈良国立文化財研究所

発掘調査及び遺物整理にあたり次の方々の協力を得た。

地権者 庄子善重

仙台市農業協同組合、大木建設株式会社仙台支店

調査参加者

斎藤誠司、赤井沢まり子、谷津妙子（以上整理も含む）、赤井沢進、今野富美子、小島美和子、小林てる、赤井沢さだ子、佐藤光子、赤井沢きすい、板橋やす、工藤系なの、赤井沢千代子、佐藤奈美江、宮城多恵、末永澄子、四窪広幸、菊地宣之、佐々田弥生、池田俊也



- |               |              |                |
|---------------|--------------|----------------|
| C-104 郡山遺跡    | C-277 矢来遺跡   | C-660 長町駅裏古碑群  |
| C-105 西台遺跡    | C-278 龍ノ瀬遺跡  | C-661 八幡社古碑群   |
| C-205 欠ノ上遺跡   | C-279 欠ノ上Ⅰ遺跡 | C-662 郡山三丁目古碑群 |
| C-206 的場遺跡    | C-287 欠ノ上Ⅱ遺跡 | C-663 諏訪社古碑群   |
| C-207 郡山三丁目遺跡 | C-505 北日城路   | C-664 穴田東古碑群   |
| C-208 長町六丁目遺跡 | C-659 堀薙師古碑群 | C-665 宅地古碑群    |

第1図 遺跡位置図

第2図 郡山道路現況平面図

3・4

郡山道路現況平面図



## II 調査に至る経過

郡山遺跡（仙台市文化財登録番号C-104）は諏訪神社北方の畠を中心に瓦が散布する地区とさらにその北方に土師器・須恵器が散布する郡山三丁目遺跡とが連繋する形で古くから知られていた。

昭和54年、郡山三丁目205-1、206-1において開発行為が計画され、記録保存の事前調査が仙台市教育委員会により行われ、多くの掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土壙などの遺構が発見され、さらに多量の土師器、須恵器、円面鏡などの遺物が出土し、7世紀末から8世紀初頭の官衙跡との見方が強まった。（註1）

これらの結果から、三町四方程の真北線を基準にした方形区割線が推定され、また「郡山」という地名が残っていることなどから郡衙跡と考えられるに至った。この地区は近年宅地化が急速に進み、このまま放置すれば遺跡が破壊されてしまう恐れもあることから、文化庁、宮城県教育委員会との協議のうえ、遺跡の範囲と性格を明らかにするため昭和55年度から5ヶ年計画で発掘調査を進めている。

昭和55年度の第1年次調査では、推定方三町外郭が西へ一町広がり、外郭線は西、南辺でその位置と構造を検出した。外郭は直径30cm程の丸材木を密に立て並べた櫛木列と、その外側に30尺離れて平行する幅3～5mの大溝による二重の構造である。さらに推定方四町の中央部で3時期に及ぶ建て替えのある官衙風掘立柱建物群を検出している。（註2）

昭和56年度の第2年次調査では、推定方四町南辺大溝から200～220cmの南方で、東西長32m以上にも及ぶ掘り込み基壇の基礎地業をもつ建物跡を検出、また「鶴尾」（しひ）といわれる特異な瓦片を発見したことから推定方四町の官衙に付属する「寺院」跡との見方が強まっている。

（註3） これらの状況の中、郡山二丁目11-17、庄子善重氏より郡山五丁目236において宅地造成のため、昭和56年5月発掘届が提出されたので、地権者、庄子善重氏との協議により、記録保存の事前調査が、仙台市教育委員会により行われ、5棟の掘立柱建物跡、何らかの施設を区画したと考えられる材木列2条、土壙などとともに土師器、須恵器、鉄製品などの遺物を出土している。

### III 第13次発掘調査

#### 1. 調査経過

第13次調査区は、昭和54年度の発掘調査で検出された推定方四町外郭南西コーナー隅櫓建物跡より約160m真南に位置し、また推定方四町の官衙に付属して造営されたと考えられる推定方二町の寺院跡の西辺部にあたる地区である。

調査区西側に即設道路が通り、この道路東側へほぼ東西に幅7m、長さ54mのトレンチを設定した。

この調査区は、現在まで畠地で、耕作による天地返し等により擾乱が著しい。表土擾乱土を重機により排土し、ほぼ中央より東側は深さ40cm程で暗褐色シルト地山面、西側は80cm程で褐色砂質シルト地山面まで掘下げ遺構の検出を行った。

#### 2. 発見遺構

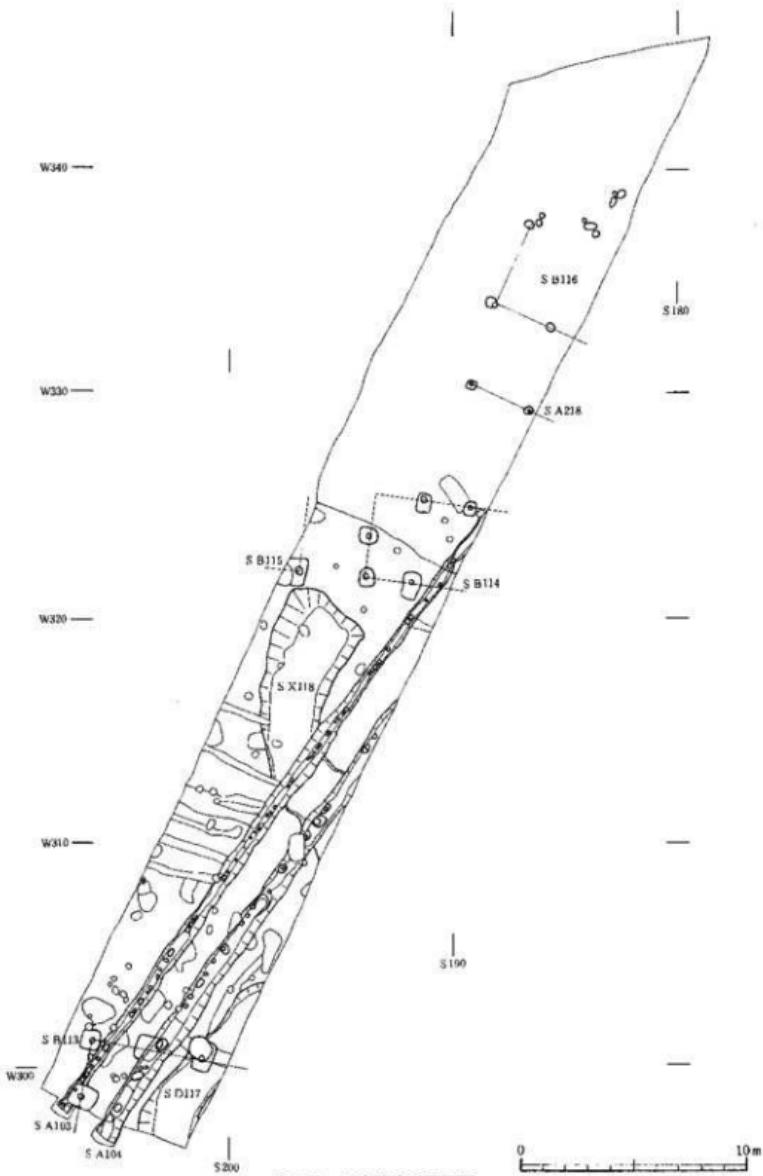
発見された遺構は、材木列2列、掘立柱建物跡4棟、柱列1列、溝跡8条、土壙4基、ピット49である。

S A 103 材木列 調査区内で33m分を検出し、方向はE-28°-Sである。掘り方は上幅32~96cm、下幅20~30cm、深さ30~45cm程の布掘りである。断面形は不整U字形で、南壁では直立ぎみで、北壁ではやや緩やかに立ち上がる。検出面から10cm程掘り下げたところで30~200cm程の不規則な間隔で、直径10cm前後の材木痕跡を検出した。また幅20~30cm程の平坦な布掘り底面で、さらに方形の掘り方を検出した。掘り方は一辺20cm前後、材木痕跡は直径10cm前後である。布掘り掘り方埋土は、3層に分けられ、1層は黒褐色シルトがブロック状に混入する褐色砂質シルト、2層は黒褐色粘土質シルト、3層は褐色砂質シルトである。断面観察によれば、南壁寄りで幅10cm程の材木痕跡は2層で認められたが、布掘り掘り方上端では検出されなかった。S B 113掘立柱建物跡に切られ、S X 118を切っている。

S A 104 材木列 調査区内で23m分を検出した。掘り方は上幅90~100cm、下幅40~60cm、深さ50~60cmの布掘りである。断面形は不整U字形である。壁は、南壁では直立ぎみで、北壁ではゆるい段をつけて立ち上がる。幅40~60cm程の布掘り底面で、材木痕跡を伴う方形の掘り方を検出した。掘り方は一辺50~60cmで、材木痕跡は15~20cmである。材木痕跡の間隔は40~110cmで、一定の規則性は認められない。布掘り掘り方埋土は、3層に分けられ、1層は暗褐色砂



第3図 第13次調査区設定図



第4図 13次調査区平面図

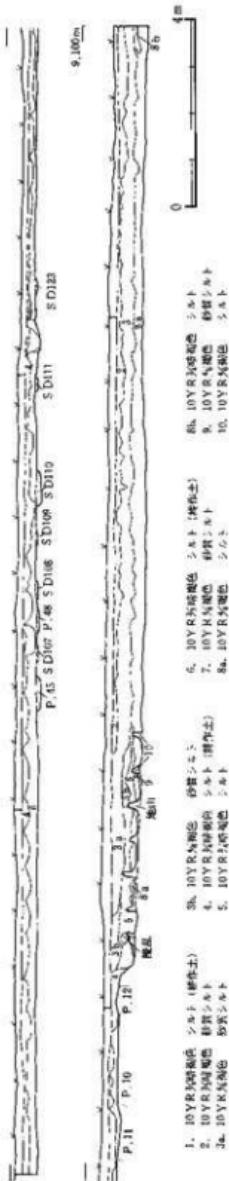
質シルト、2層は酸化鉄をブロック状に含む褐色砂質シルト、3層はにぶい黄褐色砂質シルトである。また方形の掘り方埋土は、にぶい黄褐色砂質シルト、材木痕跡埋土は黒褐色シルト質粘土である。S A104木材列中心線からS A103木材列中心線まで200cm程、方向は同方向のE-28°-Sである。S A103、S A104木材列は、S B113掘立柱建物跡との重複関係から同時期の遺構ではなく、S A104木材列→S B113掘立柱建物跡→S A103木材列と三時期の変遷が認められた。S B113掘立柱建物跡、S X118を切り、S K122土壤に切られている。

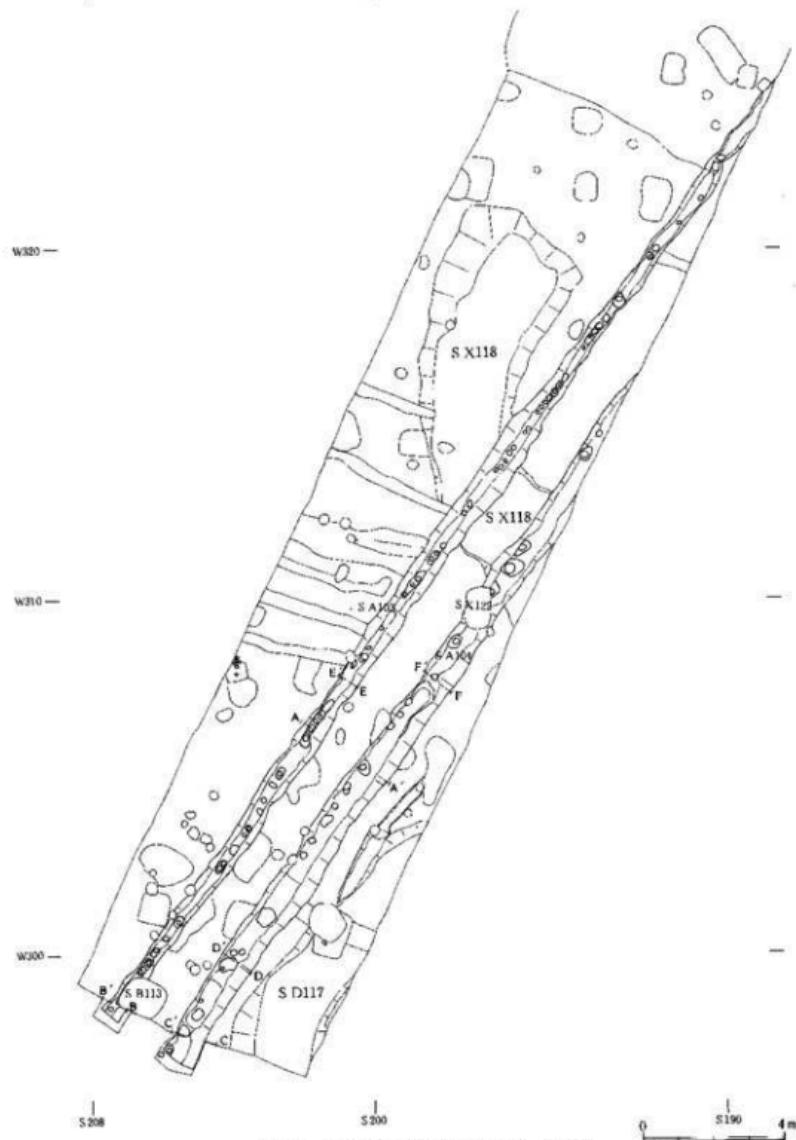
**S B113 掘立柱建物跡** 調査区東隅より検出され、東西1間以上（柱間寸法250cm）、南北3間以上（柱間寸法南より250+250cm）で、方向は南北柱列方向でN-3°-Eである。掘り方は、不整方形で、一辺80~130cm、深さ80cm程である。西1南3掘り方には100cm程の不整円形の抜き取り方を伴う。柱穴埋土は暗褐色砂質シルトである。遺物は南1東1柱穴掘り方から須恵器甕片が2点出土している。S A103木材列を切り、S A104木材列に切られている。

**S B114 掘立柱建物跡** 調査区ほぼ中央で検出された南北棟建物で、桁行2間以上（柱間寸法210cm）、梁行2間（柱間寸法東より180cm）で、梁柱列は真北方向である。掘り方は一辺60~120cmの不整方形で、深さ40cm前後、柱痕跡は直径20cm前後である。南1西1掘り方は搅乱が深く検出されなかった。柱穴埋土は黒褐色砂質シルト及び黄褐色砂質シルトである。S K119土壤を切っている。

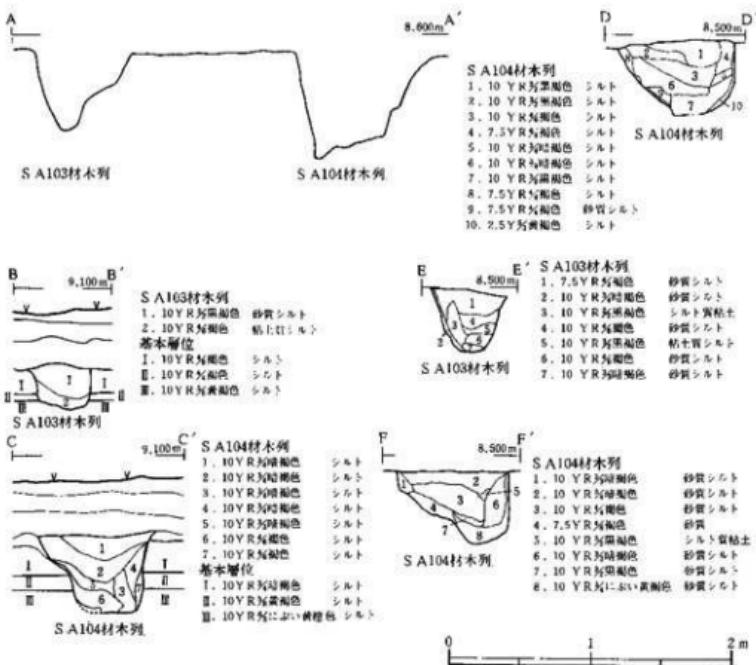
**S B115 掘立柱建物跡** 調査区南壁にかかり、方向、桁行、梁行とも不明で、掘り方1つのみ検出された。掘り方は、一辺80×120cm程の不整方形で、柱痕跡は直径30cmである。掘り方埋土は黒褐色砂質シルトである。ピットN11に切られている。

**S B116 掘立柱建物跡** 調査区西側より検出され東西（柱間寸法370cm）、南北（柱間寸法270cm）とも2間以上と考えられ方向はN-19°-Eである。掘り方は一辺30~40cmのほぼ不整





第6図 S A103, S A104 材木列跡 平面図



第7図 S A103・104材木断面図

円形で、柱痕跡は15cm程である。掘り方埋土は灰褐色砂質シルト、及び灰黄褐色砂質シルトである。

**S A 218柱列** S B116掘立柱建物跡の東側で検出され、1間以上（柱間寸法280cm）で、方向はN-18°-Eである。掘り方は一辺40cm前後の不整方形で、柱痕跡は15~20cmである。掘り方埋土はにぶい黄褐色砂質シルト、及び黄褐色砂質シルトである。

**S D 106溝跡** 幅30~40cm、深さ10cm程である。断面形はゆるやかなU字形を呈する。S D 117溝跡、S K120土壤に切られる。

**S D 107溝跡** 幅30~80cm、深さ10cm前後の浅い溝で、底面は平坦である。堆積土は暗褐色砂質シルトで、堆積土中より弥生土器の口縁部片が1点出土している。溝跡は調査区外南方に伸びまたS A103材木列に切られる。

**S D 108溝跡** 幅40cm程、深さ8cm前後の浅い溝である。堆積土は褐色砂質シルトである。堆積土中より須恵器片1点を出土している。溝跡は調査区外南方に伸び、S A 103材木列に切

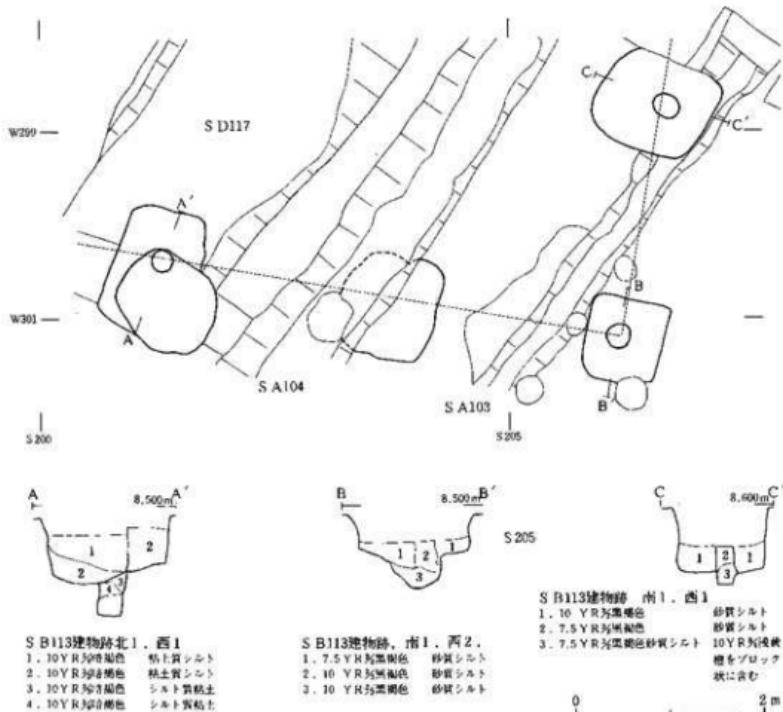
られる。

S D 109溝跡 幅20~35cm、深さ5cm前後の浅い溝で、底面は平坦である。堆積土は褐色砂質シルトである。溝跡は調査区外南方に伸びる。

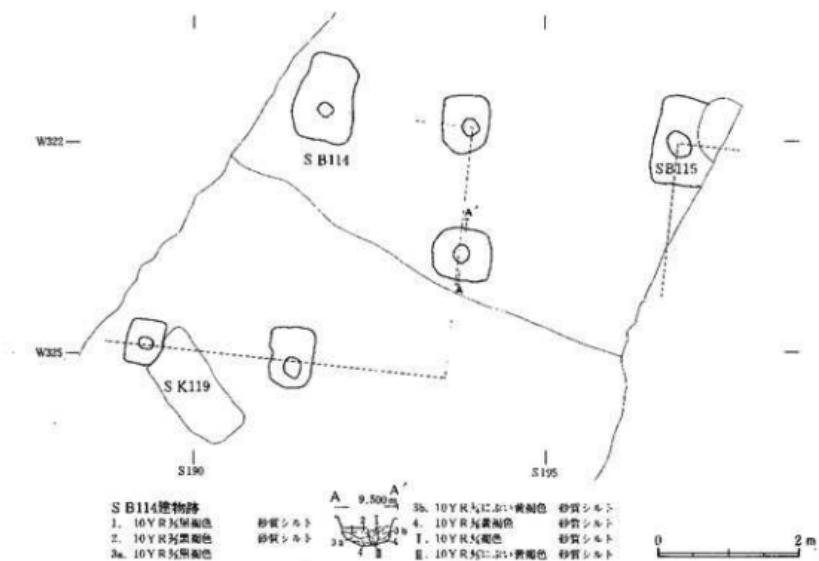
S D 110溝跡 幅90~120cm、深さ10cm前後で、壁は直立し、底面は平坦である。その底面ほぼ中央より幅20cm、深さ10cm程の落ちこみが認められる。堆積土は2層に分けられ、1層は黒褐色砂質シルト、2層は褐色砂質シルトである。堆積土中より須恵器片が1点出土している。溝跡は調査区外南方に伸び、またS A103材木列に切られる。

S D 111溝跡 幅30cm程、深さ10cm程で底面は平坦である。堆積土は暗褐色砂質シルトである。溝跡は調査区外南方に伸び、S A103材木列に切られ、S X118を切っている。

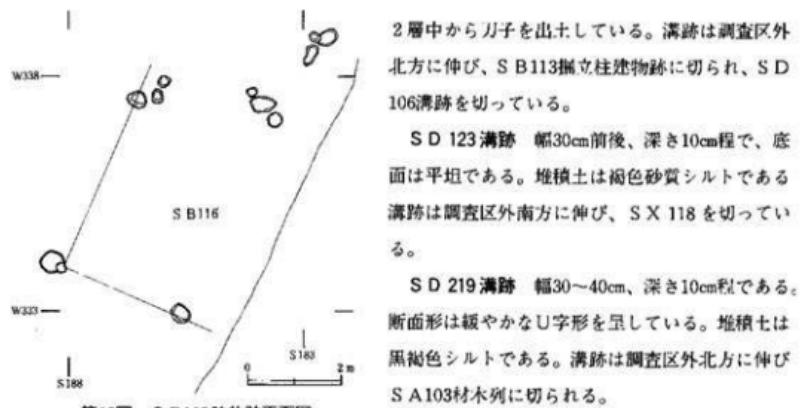
S D 117溝跡 幅210cm程、深さ40cm程である。断面形は幅平逆台形を呈している。堆積土は3層に分けられ、1層は褐色シルト、2層は黒褐色シルト、3層は暗褐色粘土質シルトである。



第8図 SB113 堀立柱建物跡・柱穴セクション図



第9図 SB114掘立柱建物跡平面図



第10図 SB116建物跡平面図

2層中から刀子を出土している。溝跡は調査区外北方に伸び、SB113掘立柱建物跡に切られ、SD106溝跡を切っている。

SD123溝跡 幅30cm前後、深さ10cm程度で、底面は平坦である。堆積土は褐色砂質シルトである。溝跡は調査区外南方に伸び、SX118を切っている。

SD219溝跡 幅30~40cm、深さ10cm程度である。断面形は緩やかなU字形を呈している。堆積土は黒褐色シルトである。溝跡は調査区外北方に伸び、SA103材木列に切られる。

SK119土壤 調査区中央やや北寄りで検出され、平面形は隅丸長方形で、長軸1.6m、短軸0.7m程、深さ20cm前後である。断面形は緩やかな立ち上がりを呈し、東壁は直立する。

堆積土は、3層に分けられ、1層は暗褐色砂質シルト、2層は褐色砂質シルト、3層はにぶ

い黄褐色砂質シルトである。S B114掘立柱建物跡に切られている。

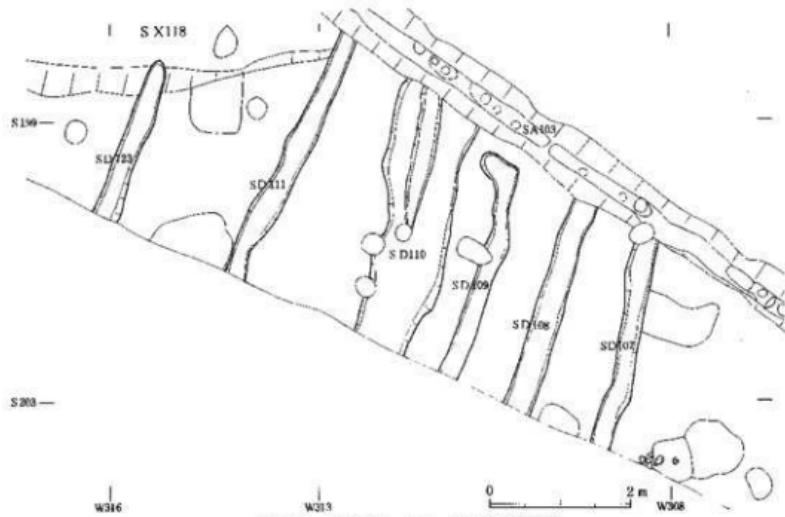
S K 120 土壌 調査区北壁東寄りで検出され、平面形は不整方形を呈し、長軸2.0m、短軸0.4m程、深さ28cm、最深部で45cm程を計る。壁はほぼ直立して立ち上がり、底面は平坦であるがその底面に直径15cm、深さ20cmの円形の凹みをもつ。堆積土は2層に分けられ、1層は暗褐色砂質シルト、2層は黒褐色砂質シルトである。遺物は上師器、平瓦の細片が2点出土している。

S K 121 土壌 調査区東寄りで検出され、平面形は不整楕円形で、長軸1.5m、短軸1.1m程、深さ20cm程である。断面形は扁平逆台形を呈し、壁は緩やかな立ち上がりを呈している。堆積土は3層に分けられ、1層は黒褐色砂質シルト、2層は褐色砂質シルト、3層は暗褐色砂質シルトである。

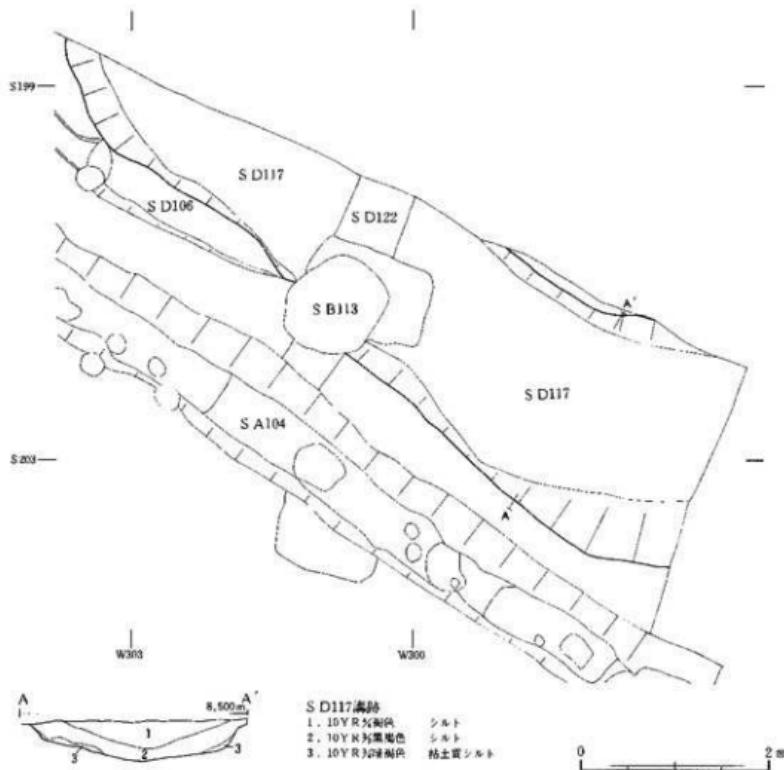
S K 122 土壌 調査区中央北壁寄りで検出され、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.2m、短軸0.7m程、深さ35cm程である。断面形はU字形を呈し、壁は直立ぎみに立ち上がる。堆積土は



第11図 SD 106溝跡平面図



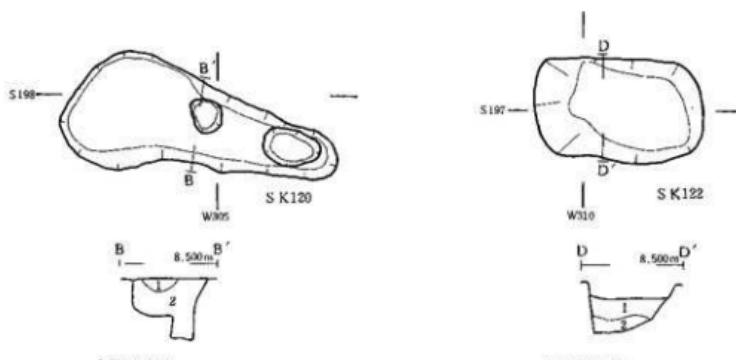
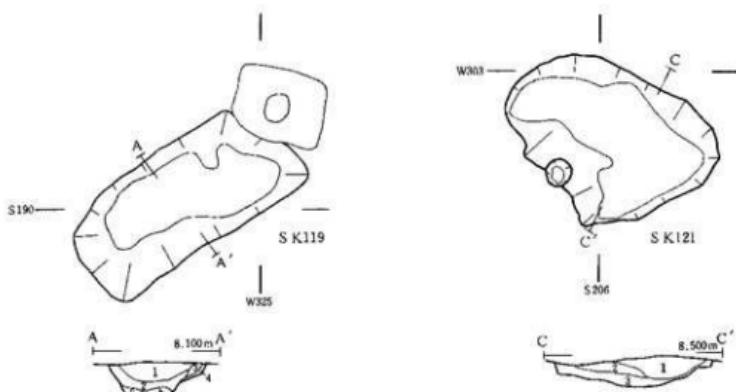
第12図 SD 107~111・123溝跡平面図



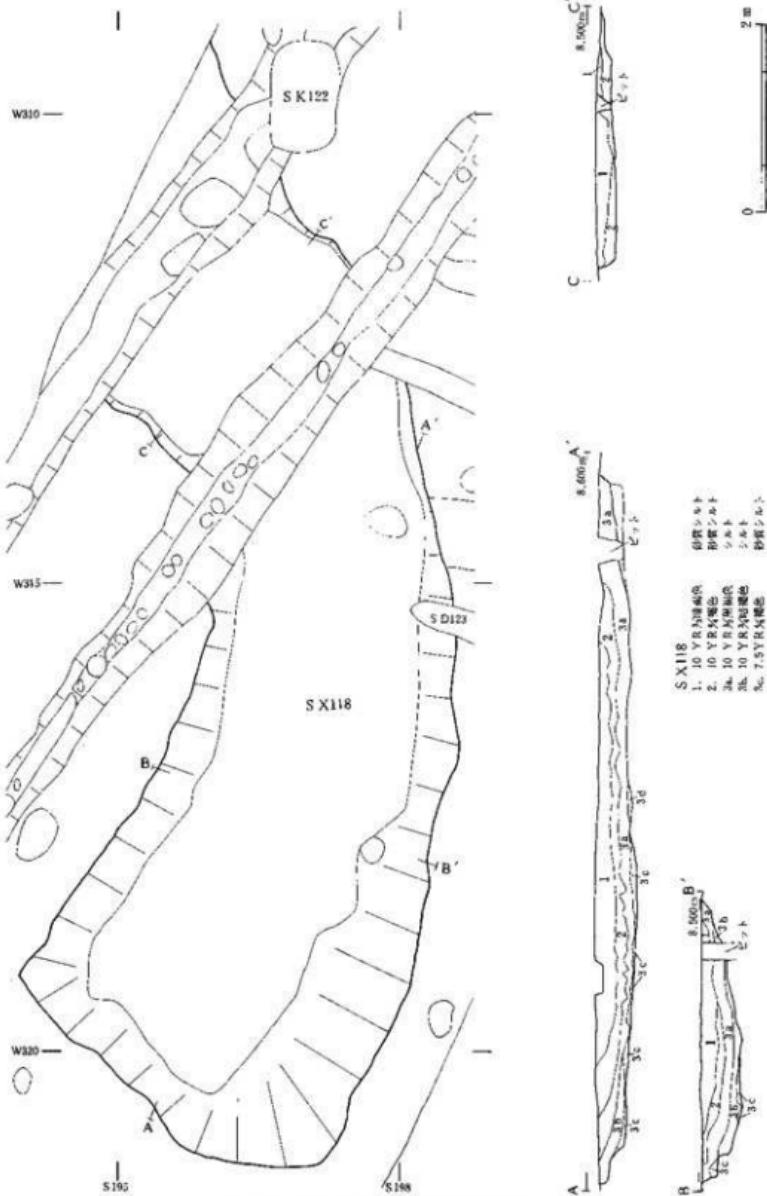
第13図 SD 117 溝跡平面図・セクション図

2層に分けられ、1層は黒褐色シルト、2層は暗褐色シルトである。堆積土1層より土師器内面黒色処理された壺、須恵器甕、瓦などの細片を出土している。S A 104材木列を切っている。

S X 118 調査区ほぼ中央で検出された溝跡は、弧状をしており調査区外北に延びる溝状遺構である。幅2.5~3.5m、深さは、西で40cm、北で20cm程度である。断面形は扁平逆台形で、南壁で緩やかに立ち上がり、北壁で、やや傾斜している。堆積は3層に分けられ、1層は暗褐色砂質シルト、2層は褐色砂質シルト、3層は黒褐色シルトである。1層で幅40×60cm、厚さ8cm程の広がりで炭化物を出土、また弥生土器、土師器壺、甕等の細片を少量出土している。3層で土師器甕片を出土している。S A 103、104材木列、SD 123溝跡に切られている。



第14図 SK119～122 土壌平面図・セクション図



第15図 SX118 平面図・セクション図

### 3. 出土遺物

第13次調査での出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦、鷦尾、鉄製品であるが、復元可能なものは極少量である。耕作による沃地がえし等の擾乱が深く、ほとんどが耕作土中からの出土である。

以下遺物の器種、器形ごとに略述する。

#### 弥生土器

弥生土器は口縁部、頸部、胴部等の細片7点が出土し、耕作土中、SD107溝跡、SX118等から少量出土するが、器形が判明するものはほとんど認められない。B-2(第16図1)は耕作土中から出土、口頸部破片のみで、口縁部に押圧による刻目を加えた小波状口縁で、口縁部外面に三条の横位沈線その下端に指頭状工具による交互刺突文を施している。B-2(第16図3)は耕作土から出土、小破片の為器形は不明であるが、外面に刺突文を施している。B-5(第16図2)はSD107溝跡堆積土から出土し、外面頸部に三条の横位沈線を施し、その下端に刺突文を施している。いずれも小破片のため器形は明らかではないが、文様等の特徴などから大王山式土器と考えられる。

#### 土師器

土師器壺・甕等の破片が多く復元可能なものは極少量である。C-172壺(第16図4)は、耕作土中より出土。非ロクロの丸底である。内外面体部中位に段を有し、体部上半から、わずかに内寄ぎみに立ち上がる。外面体部下半は手持ちヘラケズリ、体部上半はヨコナデである。内面は横方向のヘラミガキで、黒色処理されている。C-173壺(第16図5)は耕作土中より出土。非ロクロ、外面体部下端に段を有し、体部上半から内寄ぎみに立ち上がる。外面体部上半ヨコナデ、体部下半手持ちヘラケズリ、内面口縁部ヨコナデである。C-171甕(第16図6)はSX118より出土。体部上半欠損しているが、底部は木葉底をもつ平底で、外面体部下半は刷毛目、手持ちヘラケズリ、内面体部はヘラナデである。

#### 須恵器

須恵器は壺、甕、高台付壺等であるが、大半が小破片である。E-98(第16図10)は耕作土中から出土し、口頸部破片である。復元口径は47.8cm程度で、頸部外面は、二条の浅い沈線で3段に区画され、備描きによる6~8本の不規則な波状文を3段に巡らしている。内面頸部は同心円文のオサエ目がわずかに見られるが、ほとんどナデである。外面は平行叩き目である。E-97甕は耕作土中から出土し、口頸部破片であるが、外面頸部は、浅い沈線で5段に区画され、3~6本の不規則な沈状文、また棒状工具による斜状沈線を施している。頸部内面はナデである。E-107甕はSA104材木列埋土から出土。体部破片のため器形は不明であるが、外面体部は平行叩き目文、内面は同心円文、青海波文オサエ目を施している。E-105(第16図8)

は遺構検出面から出土。外面体部は平行叩き目文、内面は青海波文オサエ目を施している。E-106(第16図7)は耕作土中より出土。外面体部は平行叩き目文、内面は同心円文オサエ目を施している。

### 瓦

平瓦、丸瓦は細片が多く、ほとんど耕作土中から出土している。わずかにSA104材木列、SK120、122七城、ピットNo.44等から出土している。平瓦は凸面が繩目叩き、凹面が布目である。丸瓦は凸面が繩目叩き、多方向のナデ、凹面は布目である。

### 鶴尾

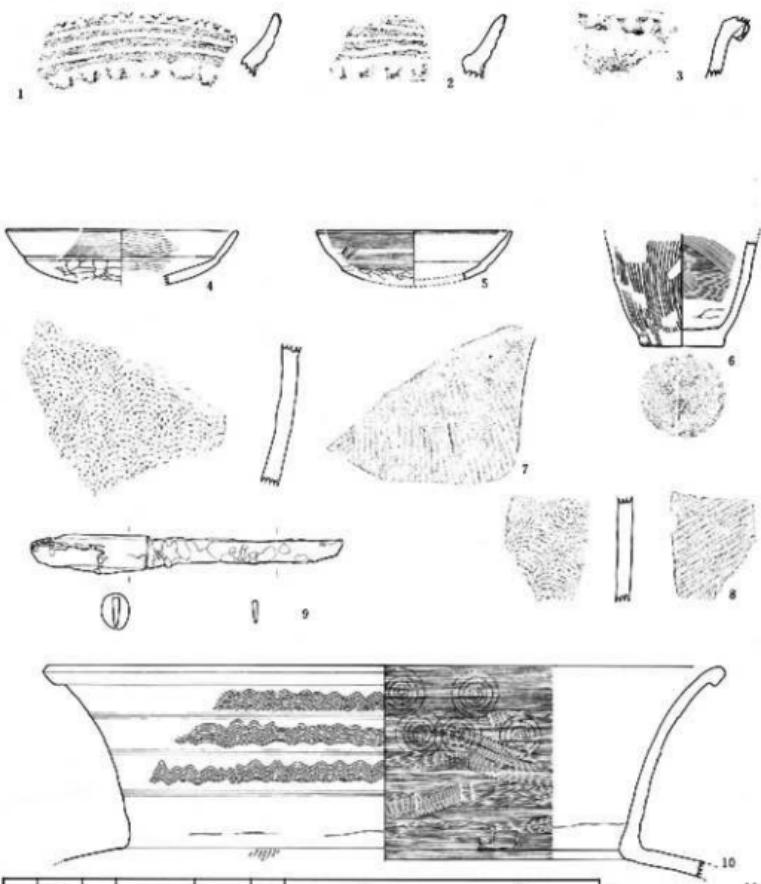
耕作土中より1点出土し、小破片のため器形は不明である。昭和56年度第12次調査区出土の鶴尾と胎土、焼成が類似している。

### 鉄製品

N-3 刀子(第16図9)はSD117溝跡堆積土2層より出土している。木製の柄を残存する平棟平造り刀子である。柄の一部が腐蝕し、また全体的に錆化が進み、不明瞭であるが、現存長は22.2cmを計る。刀身長は13.9cm、身幅は刃の付近で2.0cm、棟幅は刃身部で3.5mmを計る。柄

表 第1~22次調査区土師器不分類表

分類	名 種	調 整						実測番号	
		外 面		内 面		底 部			
		口 部	体 部	口 部	体 部	底 部	備 考		
I	a 口縁部くぼみ内側に網目						内外化粧塗り	C-7	
	b 口縁部に波瀬	ヨコナデ	手持ちハラケズリ	ヨコナデ	ナデ	手持ちハラケズリ	*	C-10, 12	
	c 口縁部がわざかに外反し立ち上がり				一部ハラミガキ		*	C-5	
	d 口縁部ゆるやかにS字状							C-108	
	e 口縁部「S」字状に外反								
	f 口縁部ゆるやかに直立								
	g 口縁部直線的に波文							C-148	
II	a 体部内側に波	ヨコナデ ヘラケズリ		ハラミガキ				C-8	
	b 体部下平に波、内面にも波	ヨコナデ ヨコナデ	手持ちハラケズリ 手持ちハラミガキ	ヨコナデ ハラミガキ		手持ちハラケズリ		C-68, 74, 86 94	
	c 体部下端に波				ハラミガキ		黒色処理(内面)	C-165	
	d 丸底量平底、体部中位に波	ヨコナデ後ハラミガキ 波こぎ	手持ちハラケズリ 波こぎ	ハラミガキ		手持ちハラケズリ 波こぎ		C-6	
	e 丸底で、体部中位に波	ヨコナデ ヨコナデ	手持ちハラケズリ 手持ちハラミガキ	ヨコナデ ハラミガキ		手持ちハラケズリ		C-92	
III	底部から口縁までゆるやかに弯曲	ヨコナデ	手持ちハラケズリ	ヨコナデ	ハラミガキ	手持ちハラケズリ	黒色処理(内面)	C-110 C-102	
	丸底で、体部下端に波	ヨコナデ	手持ちハラケズリ	ハラミガキ			黒色処理(内面)	C-72, 73	
IV									



番号	登録番号	写真	遺構・居位	種類	四種	特 質	
						外 面	内 面
1	B-2	17-3	表探	陶土器			
2	B-5	17-1	S DH07	*			
3	B-2	17-3	表探	*			ナデ
4	C-172		表探	土 壁 部	环	上縁部 ハラキズリ 底部 ハラキズリ	：ガキ後褐色地に 環状や合体部はかけ締ナメ
5	C-173		表探	*	*	上縁部 ハラキズリ	
6	C-171	17-2	S XH18 #3	*	裏	縫毛目。底部水垢部	ヘラナデ
7	E-106	17-7	検出面	檢 悪 部	*	平行引き目	吉海波文
8	E-105	17-6	検出面	*	*	平行引き目	吉海波文、板目白
9	N-3	18-3	S D117 #2	金属製品	刀子	上縁部 重ね2段抜文	口縁部 対面波文、ヘラナデ
10	E-98	17-5	表探	檢 悪 部	梗	上縁部 重ね2段抜文 底部 対面波文	口縁部 対面波文、ヘラナデ

第16図 13次調査区出土遺物実測図

は長さ8.3cm以上、幅は2.7cmである。断面形は楕円形で、厚さはほぼ均一で2.0cmである。X線撮影による観察から、茎幅は区付近で1.7m、茎尻付近で0.8mを計り、茎を柄に差し込み、茎と柄を固定する為、幅0.5cmの賣金具を取り付けている。

#### 4.まとめ

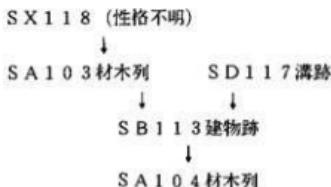
郡山遺跡は郡山二～六丁目に及び、国鉄東北本線長町駅の東側に位置し、東西800m、南北900mの広がりを有し、昭和55年度からの範囲確認調査で、推定方四町の官衙域と推定方二町の寺院域とがその中に規則的に配置されていることが明らかになりつつある。方四町官衙域は遺跡の中央北寄りを占め、櫛木列と大溝によって整然と区画され、外郭櫛木列は櫛建物を伴っていたことが判明し、郭内にも多くの建物跡の存在が予想される。また、推定方二町寺院域は官衙の南側に位置し、推定域内から多量の瓦が出土していたこと、東西長32m以上の版築基壇や寺院に関連のある木簡が発見されていたことなどから、官衙と同時代に造営された寺院跡と考えられるに至っている。

今回の第13次調査は国庫補助事業として実施している「郡山遺跡範囲確認調査」の第2年次の発掘調査と併行して行われた。調査地区は官衙域南方の推定二町寺院域の西辺部にあたり、版築基壇が発見され、寺院域のほぼ中心と考えられる第12次調査区から北西約90m、推定方四町南西隅櫛建物跡からは南に約170mの地点に位置する。現状は標高9m前後の畠地となっており、調査区の西外側には寺域線を推定する根拠となった掘り削りが南北方向に延びている。

調査区内は西半分が、耕作による天地返しが深く、遺構の遺存状況は良好と言えず、主なる遺構は東半分に集中している。

トレンチにはほぼ平行して発見されたS A 103・104材木列は方向がE-28°-Sで、両者同一方向であり、昭和55年度に第2・4次調査で発見された掘立柱建物跡の柱筋方向とほぼ同一である。これらの方向は方四町・方二町と推定される官衙域や寺院域の区画に用いられた真北基準方向と明らかに相違し、郡山遺跡の中での遺構の在り方が、外郭線の区画や建物配置において、真北線を基準にしている時期と真北方向から30°前後偏した線を基準にしている時期の二時期にわたる大きな改変が行なわれたことが考えられていたが（註4）、この調査区内でもそれを裏づけるかのようにE-28°-Sの材木列とN-3°-Eの掘立柱建物跡が重複して発見された。

主なる遺構の重複関係は次のとおりである。



S X118、S D117溝跡については規模、方向、性格等の詳細は不明であり、言及することはできない。ここで問題となるのは2列の材木列と造物跡との重複関係である。昭和55年度概報「郡山遺跡I」の中で、真北基準の造構と30°基準の造構との二時的変遷があることについて触れていたが、ここでは30°基準→真北基準→30°基準という三時期の変遷がみられた。また、これらに先行するS X118等の造構もみられる。この三時期（あるいは四時期）にわたる変遷が、遺跡全体に及ぶものかどうかは今後の調査成果を十分に検討していかなければならないが、30°基準の造構群が少なくとも單一の時期ではなく、複次にわたるものであることが判明した。

S A103・104材木列は前述のように若干時期の異なるものとはいえ、方向や材木痕跡の検出状況等、造構の在り方が非常に似かよっており、造構の性格、構築の目的など、ほぼ同様のものと考えられる。このように布掘りを行い、材木を伴う古代の造構については、郡山遺跡の中では推定方向四町官衙の外郭区画施設として柵木列、または昭和56年度第15次調査で発見した杭列跡があり、柵木列は設置された材木が密接し、材木頂部は少なからず地上に露出して、いわゆる「柵」としての機能を持っていたものと考えられ、杭列は材木痕跡の下端が先尖りとなり地山に打ち込んだことがわかるものである。このようなことからみれば、S A103、104は材木の痕跡が布掘り検出面では検出されず、土層断面の観察によっても明らかに土中に埋設されたものであることがわかり、柵木列とは言い難い。また、材木痕跡が布掘り中央ではなく、南壁際に寄っており、両者とも全て材木が土圧により南壁に寄ったとも考え難いところから何らかの意図のもとに南壁間に埋設されたものと考えられる。材木痕跡の直徑、間隔等が不規則でもあり、造構上部が削平され明らかでないことなどから、性格は不明であるが、現段階では何らかの区画施設の一端と考え、單に材木列と言っておきたい。

S B113、114建物跡は柱筋方向がほぼ真北方向の掘立柱建物であり、方四町、方二町と推定される官衙、寺院に関連する建物跡と考えられるが、同方向の建物跡や造構等が他に発見されず、この地区が、推定寺院域の西辺部にあたっていると考えられるが、それを断定するに至らなかった。

出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦、鷦尾、鉄製品である。弥生土器はわずか数点であるが、天王山式と考えられ、弥生時代の造構の存在も予想されたが、発見されなかつた。その他の遺物はいづれも小破片で、器種、形態等が明らかなものは極くわずかであるが、概観すれば、これまでの郡山遺跡の調査で出土した遺物と年代的には同時期のもので、7世紀末から8世紀前半代のものと考えられ、造構の年代もおおむね、この時期と考えられる。

## 註

- 註1 仙台市教育委員会「3、郡山遺跡発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第23集「年報1」  
1980、3
- 註2 仙台市教育委員会「郡山遺跡I」仙台市文化財調査報告書第29集1981、3
- 註3 ニューサイエンス社『考古学ジャーナル』No198 12月号「郡山遺跡の調査」1981、12
- 註4 註2と同じ

## 参考文献

- 陶邑Ⅰ 大阪府文化財調査報告書第28輯 大阪府教育委員会  
タⅡ タ 第29輯 財団法人大阪文化財センター  
タⅢ タ 第30輯 タ
- 仙台市文化財調査報告書第24集「今泉遺跡」 仙台市教育委員会 1981  
タ 第29集「郡山遺跡I」 仙台市教育委員会 1981、3  
タ 第38集「郡山遺跡II」 タ 1982、3
- 宮城県文化財調査報告書第77集「清水遺跡」 宮城県教育委員会 1981

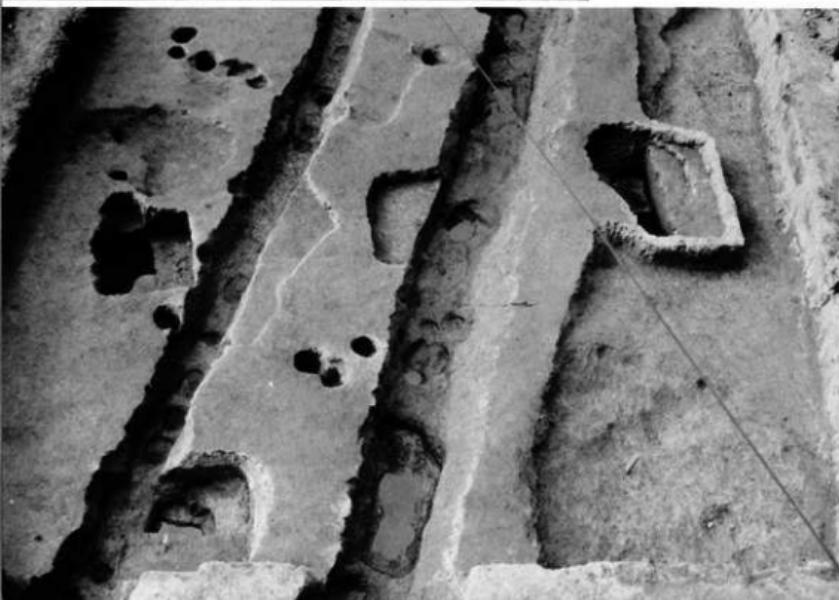
写 真 図 版



図版1 郡山遺跡航空写真



图版2 调查区全景



图版3  
S B113  
掘立柱建物

図版4  
S B113掘立柱建物跡  
西2、南1、掘り方  
セクション



図版5  
S B113掘立柱建物跡  
西1、南2、掘り方  
セクション

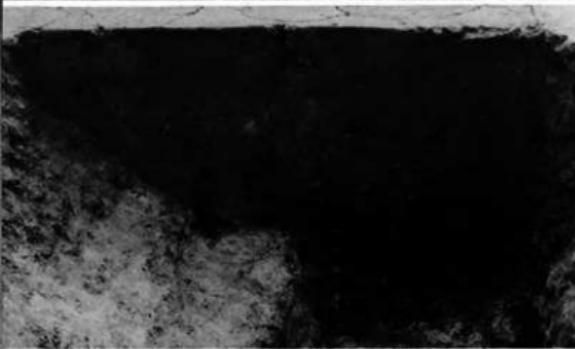


図版6  
S B113掘立柱建物跡  
西1、南3、掘り方  
セクション





図版7  
S B114掘立柱建物跡  
南1. 東2 掘り方セクション



図版8  
S A104木材列セクション



図版9  
S A103木材列  
底面検出状況

図版10  
S A104材木列  
底面検出状況



図版11  
S A104材木列 セクション



図版12  
SK119土壤  
セクション



図版13  
SK122土壤  
セクション



図版14  
SK120土壤 全景

圖版15  
S X118遺物出土狀況



圖版16  
S X118全景

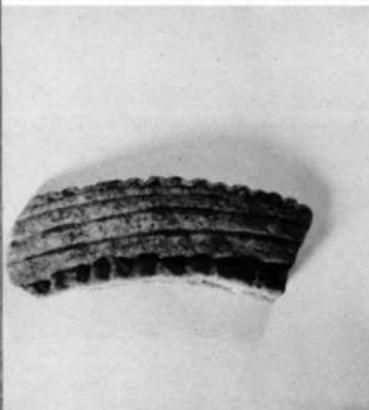




1



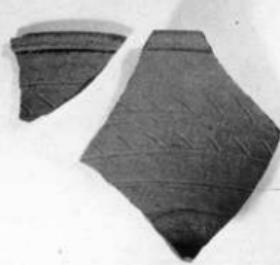
2



3

圖版17 出土遺物

1. 弥生土器 B-5
2. 土師器 C-171
3. 弥生土器 B-2
4. 猪形器皿 E-107
5. \* E-98
6. \* (A) E-106
7. \* (B) E-106



4



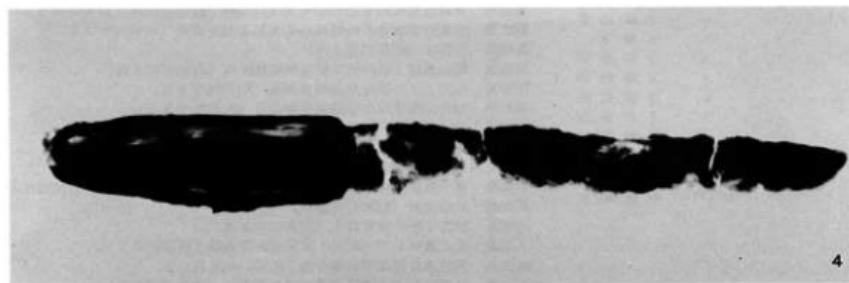
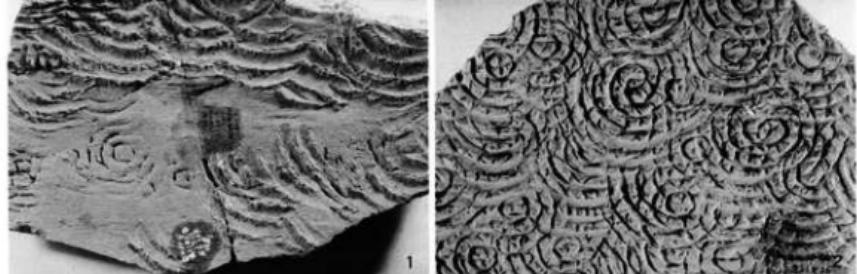
5



6



7



X線写真

図版18 出土遺物

- 1. 鎌形器皿 E-107
- 2. \* E-107
- 3. 刀子 P-3
- 4. \* P-3

## 職 員 錄

	社会教育課
課 主 係 主 事 主 教 主 事 主 事 臨時職員	長 永野昌一 幹 半坂春一 文化財管理係 長 鈴木昭三郎 立 鈴木高文 (10月1日異動) 事 山口 宏 渡辺洋一 文化財調査係 甲坂春一 諭 佐藤 隆 波 田中 利 加藤 正範 事 田中 利 結城 雄一 成瀬 茂 諭 青沼 一民 柳沢みどり 木村 浩二 藤原信彦 庄藤 洋 金森安季 佐藤 甲二 吉岡泰平 工藤哲司 渡部弘美 毛浜光湖 森野裕彦 長島栄一 荒井 格 高橋勝也

## 仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物塗屋下セコイア化石調査報告書（昭和39年4月）  
 第2集 仙台城（昭和42年3月）  
 第3集 仙台市西沢神社横六古墳群調査報告書（昭和43年3月）  
 第4集 史跡陸奥國分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）  
 第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年3月）  
 第6集 仙台市南春五本松室跡発掘調査報告書（昭和48年10月）  
 第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）  
 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）  
 第9集 仙台市根岸町宗祇寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）  
 第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）  
 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備子備調査概報（昭和51年3月）  
 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次子備調査概報（昭和52年3月）  
 第13集 南小泉遺跡一範囲発掘調査報告書一（昭和53年3月）  
 第14集 栗連跡発掘調査報告書（昭和54年3月）  
 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）  
 第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）  
 第17集 北屋敷遺跡（昭和54年3月）  
 第18集 江北通路発掘調査報告書（昭和55年3月）  
 第19集 仙台山地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）  
 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備子備調査概報（昭和55年3月）  
 第21集 仙台山開闢関係遠跡調査報告I（昭和55年3月）  
 第22集 経ヶ原（昭和55年3月）  
 第23集 年報I（昭和55年3月）  
 第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）  
 第25集 三ノ平遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）  
 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備子備調査概報（昭和56年3月）  
 第27集 史跡陸奥國分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）  
 第28集 年報II（昭和56年3月）  
 第29集 郡山遺跡I昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）  
 第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）  
 第31集 仙台市開闢関係遠跡調査報告II（昭和56年3月）  
 第32集 港ノ森跡発掘調査報告書（昭和56年3月）  
 第33集 山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）  
 第34集 六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）  
 第35集 南小泉遺跡都市計画道路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）  
 第36集 北前道路（昭和57年3月）  
 第37集 仙台平野の遺跡群（昭和57年3月）  
 第38集 郡山遺跡II昭和56年度発掘調査概報（昭和57年3月）  
 第39集 燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）  
 第40集 仙台市高速鉄道関係遠跡調査概報I（昭和57年3月）  
 第41集 年報III（昭和57年3月）  
 第42集 郡山遺跡一宅地造成に伴う緊急発掘調査報告（昭和57年3月）

## 仙台市文化財調査報告書第42集

### 郡 山 遺 跡

—七地造成に伴う緊急発掘調査報告—

昭和57年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL63-1166

